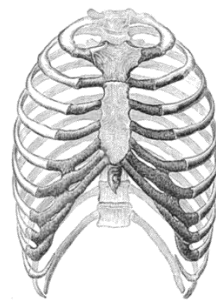


# 肋骨骨折とCT検査 広報げろ 2018.02

## 肋骨骨折とCT検査

肋骨は左右12本あって胸骨、脊椎とともにカゴのように胸腔を形成し(図①)、その中にある肺、心臓、大血管、肝臓、腎臓、脾臓などを守っています。肋骨骨折は胸部の外傷の中では最も多くみられるものです。その原因は、転倒、転落、交通外傷など、その程度によっては命にかかわることもあります。机の角にぶつけたという様な軽度のもの、ゴルフのスイングで体を捻った時や、咳で骨折することもあり、骨折の原因をはっきり覚えていないこともあります。



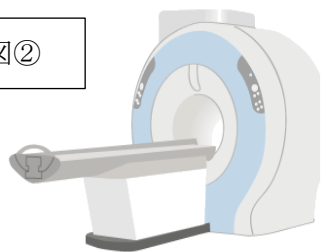
図①

症状は、骨折部位に一致した痛みで、程度の差はありますが、からだをそらしたり、咳やくしゃみで痛みます。また、痛みは数日してから感じるようになることもあります。

診断は、受傷の状況、受傷部位の圧痛、皮下出血、腫れ、骨折部の軋轢音<sup>あつれき</sup>などを確認し、X線撮影によって行います。ただし、X線診断では、肺や心臓の影と重なったり、肋骨同士が重なったりして骨折がわかりにくいこともあります。また、肋骨の前の部分は肋軟骨となっており、軟骨の骨折はX線では確認できません。骨折が確認できない場合、症状や診察所見によって骨折と判断します。

内臓を損傷するような骨折でない限り治療法はバンドによる固定処置と鎮痛剤の処方で、手術などの対象となることはまずありません。痛みがなくなるまでには数週間かかります。痛みが続くために他病院を受診しCT検査で骨折がわかったという例もありますが治療法には変わりありません。明らかな骨折では、まれに数週間後に骨折の再発や胸腔内出血をきたすこともあり、受傷後もしばらくの間経過観察が必要です。

図②



CT検査(図②)は骨折の診断には大変有力な検査法です。他の検査ではわかりにくい骨折も発見しやすく、その立体的な状態も体を動かすことなく短時間で検査できるので、痛みの強い時や体を自由に動かせないとき威力を発揮します。金山病院でも骨折の診断に際してはX線写真で診断可能な場合を除いて

CT検査を積極的に取り入れています。CT検査を行う場合、問題となるのは費用と放射線被ばくです。費用は肋骨の場合3割負担でX線撮影は一回二方向で861円、単純CT検査は4410円程度かかります。被ばく量については、単純CT検査はX線撮影検査の50倍程度となっています。検査で受ける放射線量は厳重に管理されており、CT検査1回量の10倍量(100ミリシーベルト)ではがん死亡が増えるという明確な証明は無いとされています(放射線医学総合研究所)。いずれにせよ放射線の害を心配して検査を受けない人もあれば、検査で骨折が証明され痛みの原因がわかって安心する人もいます。むやみにX線被ばくすることは避けるべきですが、医師の側から見れば、必要と判断した時には本人の同意のうえで検査を行います。